

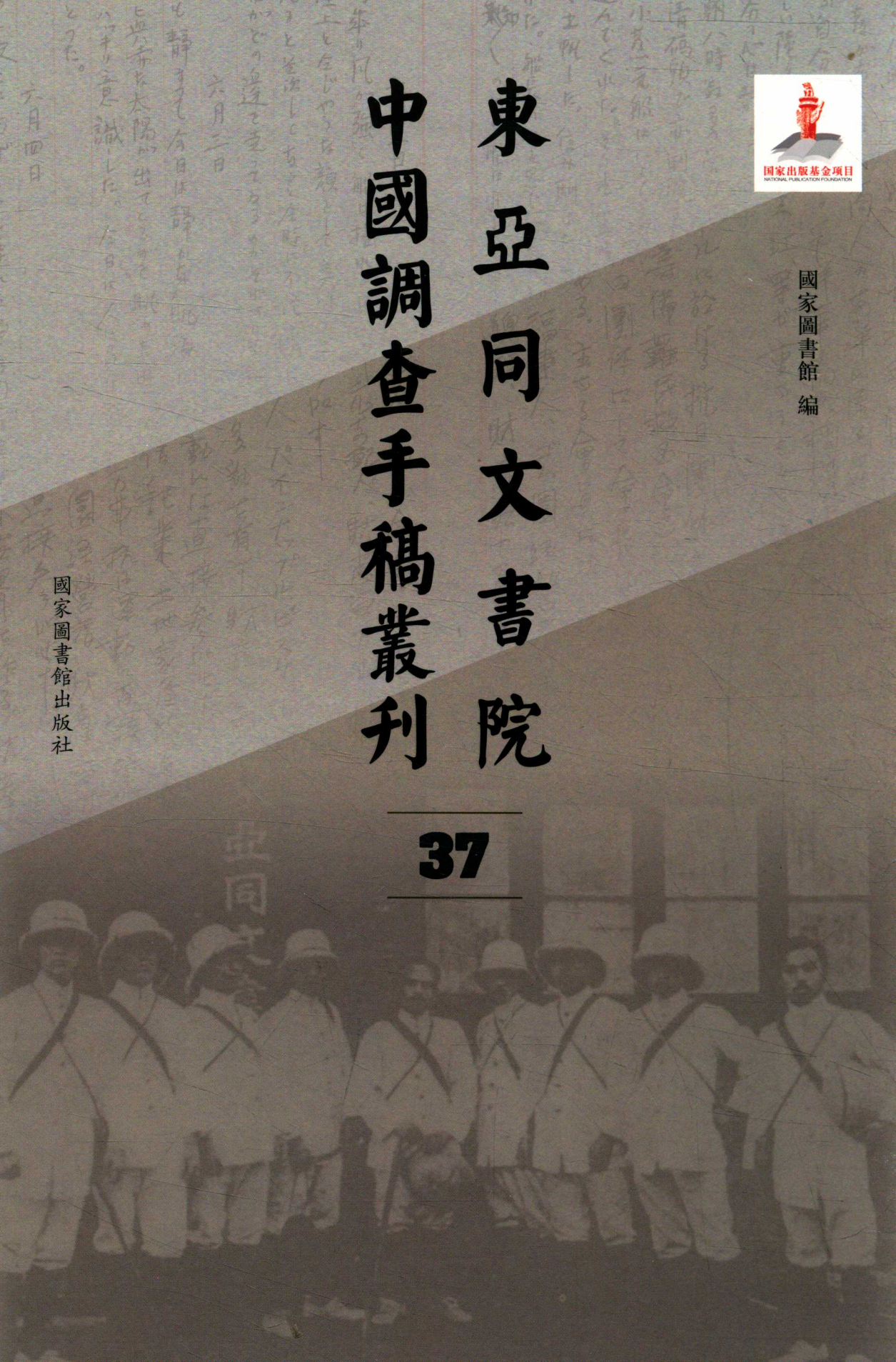


國家圖書館編

東亞同文書院 中國調查手稿叢刊

37

國家圖書館出版社





國家出版基金項目
NATIONAL PUBLICATION FOUNDATION

國家圖書館編

東亞同文書院
中國調查手稿叢刊

37

國家圖書館出版社

第三七冊目錄

昭和六年（一九三一）旅行日誌（第二十八期生）

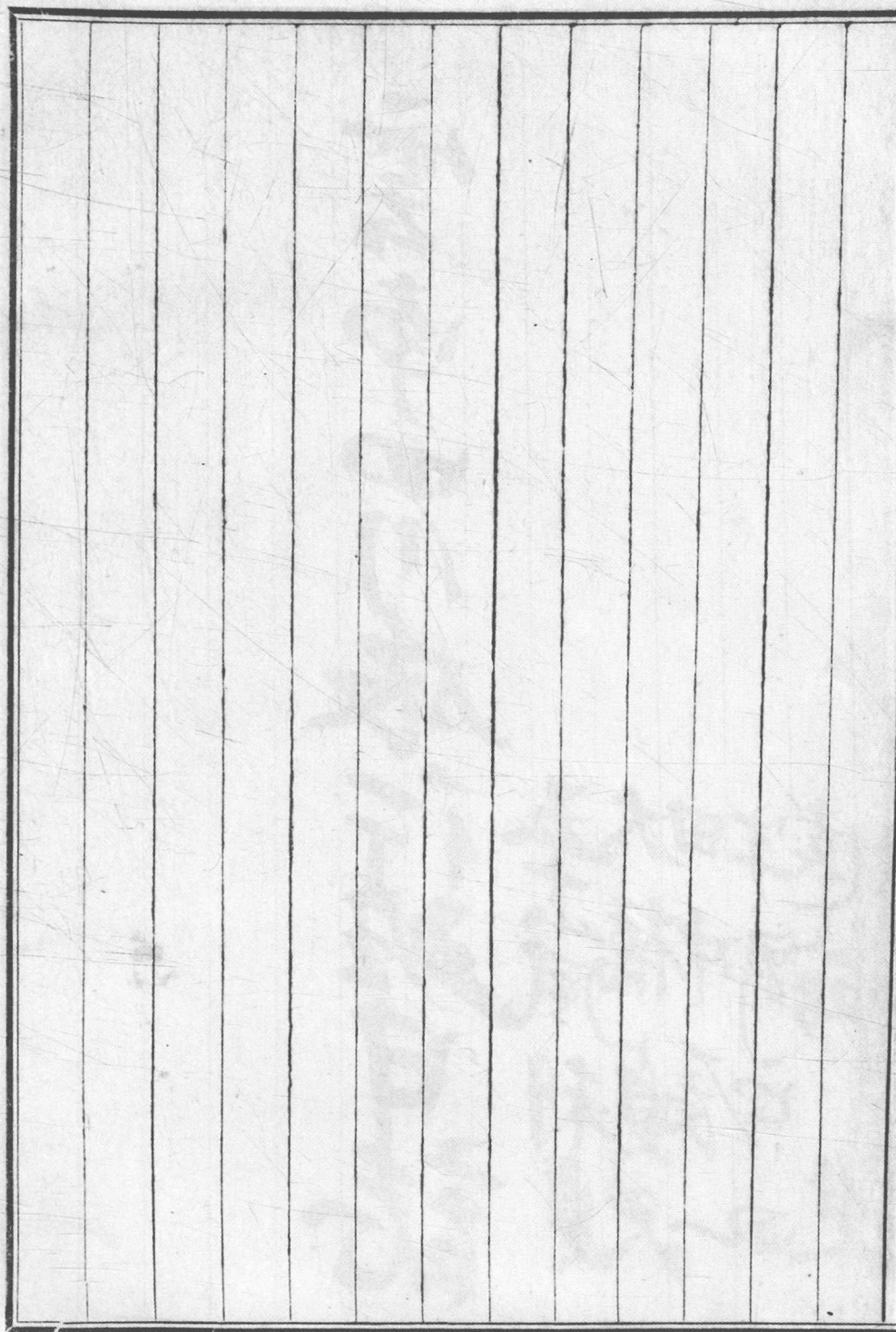
五十嵐利貞	大橋貞夫	田中辰一	宇野正四	遠藤進	第十卷		一
堀川靜	若林猶	土屋進	重富勘吾	伊藤太			一五一
土谷莊八郎					第十五卷		二一三
「白川俊三	岡本豐	上野宏	野中義雄	安達郁太郎」	第十六卷		二五一
岡部善修	鈴木秋義	淺野修	藤田薰	田中純愛	第十七卷		二九五
小島桂吾	坂井佳彥	二村文彥	平野和夫		第十八卷		三八五
宮原豐	三好宏	濱中隆昌	井口保夫		第十九卷		四三九
高橋房男	柴崎章雄	本田祥三	西由五郎		第二十卷		五二九
佐藤貞司	土井正美				第二十一卷		六〇五
小島誠	正林秀夫	加藤和夫			第二十二卷		六三一

松川日誌

雲南旅行班日誌

五十七歲 利貞
大橋 貞天
田中 辰一
宇野 正四
遠藤 信

東京司文書院調查報告用紙



(4)

六月一日 月曜 曇後晴

六時起床 三月月の旅(の最初の朝だが別)に変わった事柄
 せぬ。今夜の旅にはき(と何か起りさうだ)と云ふ先輩
 教授の言葉が終分が辛にならう、どうしても諦めるこのコースを
 突破せねばならぬと言ふ決まり方がきついに強い。何と云ふ物の
 仕未をつけて筆算と命人長、こたへしたか荷造りも終つた。
 任意興り、寫眞を撮る。さうして居る所に坪川誠居の班
 はお敷してしまつた。嵐吹けノ、と爆竹に送られて最後に、我
 の自動車は校内をすり抜けたのは丁度八時に五分前だつた。
 入る以来旅行隊を見送るを計三度、其度毎にいづくもあは
 だ、(たゞのながい)今更にか送られる身になつては、そんな氣分は
 要にしない。

(1)

曇つた空だ 掛けた茶色の旅行眼鏡のせいでもな、い

朝露に上海の町はくすんで街路樹の緑は映へぬ。旅立ちには、
余り相識くない。九時後、同碼頭からラニキに乗つて、南東へ
向つて上海を離れる。

船は日清汽船の嵩山丸と云ふ薄汚い貨客両用船だ。舳舻
甲板旅客なるもの目ありに見る。押合ひへし合ひ廣くはない
甲板に所せまいまでに来り込んでゐる小汚い人の群は何人とも
形をたもたない。フツンが洗面器たふひまで持ちこんで
まるで地震が来るに違ひたてられた避難難民そのまゝだ。
或は又ビストン持った印支人に監視されて居ると云ふは、レヘリヤの
流行に、何時かはと兆き、機会をわかつて居る囚人、妾ともし
見られる。何れでも旅の最初にあつて此妻らしい有様だ
皮胆を抜かれた事であつた。従ひそれにもせずして怒るゝい
たのは船主だけは「善だと言ふ虫蛇のい、要求を慥に折水

られて、さて道すがら三等室の鼻へ臭氣と薄味が、とであつた。

大體言船は海賊に名高い南洋那海を行く、二階の一二等室と下の三等室以下、部屋との間には、嚴重な鉄柵を廻り、おまけに一旦後急の場合には、蒸気噴出して海賊の侵入を防ぐ鉄板までいっている。その鉄柵の隙

には、斥候人の捕が、交替に見張りに立つて居るのだ。

現代の海賊は中世紀のそれと、全く異帆に、全く設備を浮出させて、遠くの彼方まで押し、そして来る、と云ふ様な、いとロマンチックなものではない。先ず船に入らう、と時機もと見れば、船をそのまゝ、彼等の根據地に回送、とすゝと云ふ悪賢い、近代の味も素々あるが、いふ海賊である。鉄柵はこれに備ふるものものだ。かたしては一等船客にたりしめて

4
居、妙齡の左那、弄人の（さうりた）に、大車と稱
つたと言ふ事もある相が、何しろ船は未だ一皮もかゝる要
目を見たことは無い相で、尤も吟味して乗止ます所かいなと
は後で事勢が長、のう白慢なつた。

十時半、念々出帆、今迄聞いても、若やんども詮ないと言
ふところだ。見下ろす桟橋、二には馬場先生、久保田先生
、小沢先生、手道部員、お人、顔々々、歌つて見られる
光、吹け吹けの旗、歌が、一時ばかりは悲壯な意を漂ひ立
たして、ともしば、涙が、こぼれ、相お氣になる。

振る半中の影、もうすれて、從尊へる祝園の時計塔も
次第に小さくなる頃、船室にひまわり、だが何へとみめ
な姿だ。えん、活い、室にたてこめて、香煙までの夜、書を
読む、わ、わ、わ、わ、と思ふと、實にうんざりする。併し飯は

5
ナしておらず、はきい。それかせめてもの取柄だ。

儘めに許され、等の甲板に出、藤椅子に依り、持て
来た雑誌に目を通したが、懐然と暮れぬ頃、船室に
引返へす。夜は佳然なるまにウィスキーの瓶をあけたが、
さてやるやない地である。酔をやりて、儘に眠りにへく。
因みに一行は五班に午り橋本宅原等の班をかり
へて総勢十五名だ。

六月二日 大船 晴

八時に起きたが、板のベッドのなかに体がすっかり延びて
し、つて痛むと痛むと。午前九時より午後五時
は一等甲板に出て、ものとお達し、来た。先づ二重で書お
は、おし、過じせるわけ、早速、及巡査に距ての鉄柵を
開けて貰つて昇天する。甲板旅客達が不思議相に

見く居る前を。だが果たない見ゆ亦であるをふ。
塩風に吹かれ乍ら雑誌に読み耽る。久しぶりによりぼんやり
としふりにはふと来がした。コーヒをのむ。甘い餅菓子を
常性に食いたちた。午後は花やトランプに時を過して
五時また新しい寝所へコソと歸入る。

今宵も亦ウチスキーの力をかりて拾時やと、浅い眠りに就く。

六月参り日 水曜 晴

よく晴れて氣持いい船旅だ。トランプや花、五目ならぶ
に一日を送る。夜は月が美しくつた。甲板の上に星々と雲
言に眠る。あけられた甲板船客。肉に立つて輝く月を
仰ぐ心地けけりしかロマンチックなものだ。明日の我の勝利
を祈る英雄の心のその如きを感ずる。

六月四日 木曜 晴

八時起床、船はもう厦門の港に錨泊してゐた。緑樹に
かこまれた赤白の洋館の立並んだ美しい島が、すぐ目
に見える。あゝ鼓浪嶼なのだらほ。一等船客が皆下船
たから此方へ移り込へとの船長の叫びをきき散聲を
あげて荷物を運ぶ。これでせんは一番よい朗らかな
船旅が出来ると云ふもの。九時船板に乗つて島へ向ふ。
厦門は厦門埠と鼓浪嶼。二島からなる港である。コ
レは南洋華僑の別荘地だ。鼓浪嶼は詩の島であり、
夢見る様な島である。激次に勾配をなした迷路的な路
次、路次をくしはこんで何処までも遠く、くすんで利
がやに棕色の土環、そしてうす暗いまで繁茂した
茶の園の植物、楸樹が、緑の肉に滴る血の様な赤い
花が咲く。

てゐる。小さなカリツツの尖塔、異玉的な風変りの建物
 見え上げる空は飽く迄も青く、見下す海は飽くまで碧い。
 一寸長崎のそれにも似た感じがする。静かな眠つた様だ。
 風景だ。

また、いこ屋のある領事館に寺島領事を訪内し、豊島
 奥田の二先輩にもお目にかゝる。昼食まで利用して島の中央に登
 へる日光岩に登る。此処からは島全体が一々指呼の内にある。

裏海岸は日本画的な美しい海景色、水の浅さを感ずる。明朝
 の恢復を計つた彼の鄭成功は一時この島に據つたと云ふが此の高を
 に坐して祖國東の回復を願つた彼の心持を察して、その姿を
 しのんで見た。此島の美しさの様は彼も亦美しう人のロマン
 チストであつたらう。此処を去つて島のあちこちを散歩する。初めて
 見る熱帯植物がとてめめずらしい。塩田、塩釜と云ふところでは水

を飲んで十二時頃饅頭館に引返す

―書食は柏原別館で両先輩からや馳走になる。食後の山の二人は海水浴場へ豊島氏の案内で、工下の二人は町（散策に出かけたが、其の他の班員は一同縁の大神にかこまれたべらこで心ゆくまで午睡快をむさぼる。

二時半、領事館の自転車に送られて對岸の厦内島にある厦内の支那町を見物する。此処は馬場先主所謂支那町といふ所なのであるが、汚れたつたのは其の上の所、今は四角の幹線道路が作られて道の終末には支那館の美しさを持ったおなじみの中山公園が作られて居る。従って道をさしはさんで建つ新厦には安物下り、近代性を誇る品物かうず高く積んである。

大体厦内は皆後地が全く荒々たる岩石からなる丘陵

ちので従つて此の海岸地にせうこましく立並び今でも一帯
 横所へ是を踏み入れ、其の河を思はれる程の深い所であつた
 のだが今は其の丘陵を切開いて鋭い山と市区改正に
 帮めて居る。皆後地だが丘陵で荒涼たるものだから此の地には
 一水と言ふ産物はなく唯福州と共に福建省に於ける外貨
 の輸入港としての其の存在価値を有するに過ぎぬ。

全人口二十万、日本人居住者は三百人、中国人は頗る彼國
 者及び其の家族である。各僑人の来住せる者も多し其の商
 船は六戸に達する云ふ。四時船に歸る。積荷の卸すか
 歸れて出帆したのは宵闇濃い夜の八時だつた。

六月五日 金曜晴

岩石からなる島や岬の内を通りぬけて十時船は頭
 に着いた。韓江の沿岸、白亜の建物、明るい緑の並木、

そんなものが一時に秋夜の中に入る。幸ふきい明快な
 色模彩だ。佛蘭西の馳名艦が居た。領事館の人に
 迎へられ白帆艦で上陸、更にバスで郊外の領事館へ、
 領事代理の戸根本氏を訪問、十八期の先兆事——で臺
 々たる肥大漢。挨拶状を寄せて居いたのは吾輩丈か
 つたので大分不足を云われた中、食が通水で四時頃頃く。
 食後、今日英子船で帰つて来た羅君の案内で、
 頭、此を見物する。幸傍の送金でやつて居る、食民工
 藝院、東瀛、後、中山公園等々。食民工藝院は
 食民の食事を収容して、戦術、藤田工、果樹栽培等々を
 社会施設の一つで、これあるために支那人町に多い、
 此処では強ど見おらぬと云ふ。割金にやつてゐる。東瀛
 学校は台
 湾人教育の爲にもうけられた日本小学校で、此処では可なり